I-11

伊藤ていじの論考「建築家と民衆との疎外現象」（1961 年）について

As for Teiji Ito's essay "The Phenomenon of Architects and the People" (1961)

○吉村凌[1]，　田所辰之助[2]

*Ryo YoshimuraTaro[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

Abstract: By focusing on the characteristics of his essay "The Phenomenon of Alienation Architects and the People" (1961), he clarified the following. Ito considered issues surrounding the relationship between architects and society throughout the entire design process. He was trying to find the core of the problem surrounding the relationship between architects and new building forms that arose in postwar Japan's social philosophy. For Ito, the ``people" is not simply the subject of a design methodology, but is derived from Ito's unique perspective of gaining insight into the position of architects within the ``form of production" and exploring the role of architects in society. It was a philosophy that While discussing the ``people" in order to recognize the reason why the ``alienation phenomenon" cannot be avoided, a mechanism was paradoxically created to distance the ``people" from architects.

１．はじめに

伊藤ていじは，中世住居史を専門とした研究者であり，『日本の民家』（美術出版社，1962 年）の著者であることが広く知られている．一方で，1950 年代後半から 70 年代へかけて，建築・都市に関する批評活動に積極的に携わった．個人での建築批評，「八田利也」，「都市デザイン研究体」，「デザイン・サーヴェイ」と，伊藤の批評活動は多岐にわたっている．これらは，1970 年代を中心とした日本の建築批評のなかで盛んに問われた論題であり，伊藤の批評活動はいずれもこれらの議論の初期に位置すると考えられる．

とくに，伊藤が批評活動をはじめた，1950 年代後半から 60 年代前半にかけては，周辺の議論[1]に敏感に反応して，多くの論考をつうじて建築批評に取り組んでいる．［Table 1］本稿では，その一端として，論考「建築家と民衆との疎外現象」（1961 年）の特質に着目することで，伊藤の初期の批評活動における理念的基盤を明らかにしたい．

２．「生産形式」のなかでの建築家

２−１．比較対象としての明治以前の日本建築

まず，明治以前の日本建築を論じている点について着目したい．伊藤は，明治以前の日本における建築家（設計者）と建築主との関係について，以下のように述べている．

「江戸時代や室町時代や，もっと遡って平安・奈良時代においては建築家という職業がなかったから現代の場合と直接に比較することは適当であるとはいえないが，公卿や将軍の邸宅の平面や立面を決定しようとする場合，通常企画を担当するとみなされる行事や奉行が基本的な計画をたてるであろう．しかしこの場合でも実際の居住者である公卿や将軍の意見と要求とを直接にきいて，それを計画に反映させることができるから，両者の関係は直接的である．つまり疎外現象は形式的には存在しないといえるだろう．」[3]

Table 1.
1950 年代後半〜60 年代前半における伊藤ていじの主要論考
（八田利也[2]の論考も含む）

刊行年月	著者名	論稿名	刊行物名
1956.11	伊藤ていじ	狂い咲きの桂離宮	新建築
1957.05	伊藤ていじ	建築家の主体性の可能性	建築文化
1957.07	伊藤ていじ	山形にみる地方の造形	新建築
1957.07	八田利也	巨匠への道	建築文化
1958.02	伊藤ていじ	新しい伝統創造への前夜	建築技術
1958.04	八田利也	小住宅ばんざい	建築文化
1958.06	八田利也	都市再開発と建築家--都市再開発の展望とフリーアーキテクトの運命	建築文化
1958.07	八田利也	都市開発は建築家に市場を与えるか	建築文化
1958.09	八田利也	「ばんざい」始末記	建築文化
1958.09	八田利也	小住宅の未来像	建築文化
1959.05	八田利也	都市の混乱を助長し破局に到るを待て	建築文化
1959.06	八田利也	伝統論の系譜と哲学	文学
1960.06	八田利也	現代建築家気質--乱世における建築の哲学	近代建築
1960.06	伊藤ていじ	彼がもし根っからの建築家ならば	近代建築
1960.07	八田利也	近代愚作論	建築文化
1960.09	八田利也	都市のアメニティを確保するために	都市問題
1960.09	伊藤鄭爾	住宅の変遷について	日本歴史
1960.11	八田利也	想像力を培養する教育方法	建築文化
1961.01	伊藤ていじ	建築界' 60年の断面	建築文化
1961.01	伊藤ていじ	時評・掃きだめとしての建築	公共建築
1961.06	伊藤ていじ	始まって終わった建築／東京文化会館	建築文化
1961.08	伊藤ていじ	組織論展開のまえに	新建築
1961.08	伊藤ていじ	座談会・巻頭論文連載を終わって	建築文化
1961.10	伊藤ていじ	建築家と民衆の疎外現象	美術手帖
1962.03	伊藤ていじ	柱--空間に秩序をあたえるもの	近代建築
1962.04	伊藤ていじ	悪人もなお往生せず	近代建築
1962.06	伊藤ていじ	華麗なるツゴモリ伝統論／「伊勢」に映える丹下像	建築文化
1962.06	伊藤ていじ	都市のなかの建築	近代建築
1963.06	伊藤ていじ	小堀遠州における現代の発見	建築文化

明治以前の日本建築は，建築家（設計者）と建築主との関係が「直接的」であると記している．明治以前の日本建築との比較のなかで，現代における建築家と社会との相関関係を析出しようとする，という伊藤の視座を読み解くことができる．

２−２．建築家と民衆との相関関係をめぐって

また，ここでは「疎外現象」という問題が設定されている．伊藤は，この点について，次のように述べている．

「使用者と建築家とが直接関係をもてない場合，そこには

１：日大短大・教員・建築、　２：日大理工・教員・建築

疎外現象がみとめることができるだろう．現代においては，いわばこうした民衆と建築家との疎外現象はますます拡大しつつある．それは好むと好まざるとにかかわらず，この疎外現象はより一般化しつつある．」[4]

「使用者と建築家とが直接関係をもてない場合」に「疎外現象」がおこると記している．伊藤は，要因として，次の４つを挙げている．i. 建物供給の社会化，ⅱ．建築の社会的性格の増大，ⅲ．公共建築の増大，iv. 社会的性格を包括した新しい型の建築の発生．たとえば，iv. では，以下のような具体例が示されている．

「この場合工場を考えるとよい．工場で働く人たちのすべての意見をきくことはできるわけがないし．たとえ，それらの意見が何等かの形でもとめられたとしても，設備や機械，生産形式の要求をふくめることはできない．（中略）協会の代表者としての理事の意見を全面的にきいたからといって，協会全員の意見をきいたことにならない」[5]

ここでは，「疎外現象」が，設計段階のなかで発生していると指摘されている．伊藤が，建築家と社会との相関関係をめぐる問題を，設計過程全体をつうじて考えていたことが理解できる．また，戦後日本の社会理念のなかで誕生した，新たな建物形式と建築家との関係をめぐる問題の核心を見出そうとしていたことがわかる．

２−３．民衆論批判として

1950 年代の建築論壇では，さまざまな建築家によって，建築家と社会との関係をめぐる議論が展開されていた．[6] なかでも，「民衆」という言葉を手がかりに，設計活動を行う上での「拠り所」が探求されている．以下の記述からは，建築論壇に対する伊藤の視座を理解することができる．

「民衆と建築家との疎外現象をひきおこす要因が，現代の社会経済機構や生産形式に深く根ざしている以上，私たちはその疎外現象のさけることのできない所以をみとめて，その上にたって建築家の実践原理をたてる必要がある．」[7]

「疎外現象」をさけることのできない所以をみとめ」る必要がある，という主張に，伊藤が，当時の建築論壇に対して批判的な立場であったことがわかる．また，伊藤にとっての「民衆」とは，たんなる設計方法論の対象ではなく，「生産形式」のなかでの，建築家の社会的な役割を洞察する，という伊藤独自の眼差しによって導き出された理念であった．

２−４．　建築家と民衆との「接触」点

論考の後半は，前半部分に記された，建築家と民衆との相関関係に関する主張をもとに，当時の日本の建築家の，新たな方向性を示す内容となっている．伊藤は，「ビューログラシー化の傾向がますます一般化する」社会では，「建築主の意見と要求を全面的にうけいれると建築家としての良心に反し，結果として建築的にまずいものをつくらなければならない破目においこまれる」[8] と警鐘を鳴らしている．そのため，伊藤は，以下のように，従来とは異なる方法で「民衆」を捉えようとしている．

「民衆をどうとらえるかは建築家の権威に属するものであって―また民衆というのは建築的にはそういう形でしかとらえられないものであり，建築家はひとりの民衆として立派にあることによってのみ評価の規準と民衆との連帯感をもつことができるからである．」[9]

「建築のなかの民衆はつねに建築的に追求することによってとらえられるべきであって，いまや建築家が民衆と接触できるのは，完成された建物が民衆によって使われたときにはじまるといってよいだろう．」[10]

３．おわりに

ここでは，設計段階においては，建築家と「民衆」とを切り離すことが必要であると記されている．「民衆」を論じながらも，建築家から「民衆」を遠ざけるための仕掛けなされているという点に，この論考の特質をみることができる．

通説では，1950 年代から 60 年代前半の日本の建築界は，経済成長の影響化のなかで，建築家独自の方法論が多様化した，という指摘がある．[11] しかし，建築と社会との「接触」が議論されていた時流に対して，逆潮する伊藤の理念が論じられた点に，本論考の主要な特徴を見出すことができる．また，その扇動的な記述からは，逆説的に，戦後日本の社会理念のなかで，建築家たちが自らの社会的な役割を再編せざるを得なかったという困難な状況を際立たせ，象徴していた．

４．参考文献

1）　1950 年代～60 年代前半の日本の建築論壇では，民衆論，伝統論，組織論，住宅論などをめぐって，さまざまな建築家や建築批評家によって議論された．

2）　伊藤は，1958 年～61 年にかけて「八田利也」（磯崎新（1931-2022），川上秀光（1929-2011）との共著）というペンネームで批評活動を行っている．

3）　伊藤ていじ「建築家と民衆との疎外現象」『美術手帖』美術出版社，195 号，1962 年，p.92

4）　同，p.93

5）　同，p.93-94

6）　1）に同じ

7）　同，p.94

8）　同，p.95

9）　同，p.98

10）　同，p.98

11）　鈴木博之，中川武，藤森照信，布野修司，松山巖，三宅理一「ありうべき〈戦後建築〉のイメージ」『建築文化』彰国社，43 巻，500 号，1988 年，p.88